

被成候。印行の儀も被上候上にて、御親不被成候ては成間敷候旨被仰候。大極圖説の解も、御吟味被成置候。其外もか様の類御座候得共、何もかも先御指止被成候て、右冊子に御懸り被成候由。御講書も六々に御極置、一月に三度宛に候。孟子と近思錄を迭に被講候。聴衆も餘る程に御座候得共、篤志の衆は四五輩ならで無之候。御役人衆の内にては、誰殿と御尋申上候へば會て無之候。役人衆は惣て閑暇無之、すぎと名利の場に奔走のみの由。黒田豊前守殿餘程學問すきに候。荻生惣右衛門へも參會有之候。只今惣右衛門弟子の内も、罷越候もの有之候。是は彼が學を信仰と申にては無之候。荻生事樂を好候て平生簫を吹居候。禮樂と申に禮は嫌にて候。孔子武城にて絃歌の聲をきゝ給ひて、それに付て子游君子小人學道の語あり。此道と云字は樂の事に候。聖人之道は樂に在之事の旨、か様成安説共を申候とて御笑被遊候。右の通に候處、黒田殿も樂を好み被申候故、荻生並弟子をも呼被申候て樂の詮議にて候。あまり頼母敷事は無之候得共、よほど學問は好み被申候旨御咄に候。頃日も荻生事被申出候て、變化氣質と申事、學問に

てはならぬ事の旨荻生申候。難心得と存じひたと及問答候得共、終に合點不仕と被申候由。安藤對馬守殿よりは餘程宜敷可有之と、珍重被思召候旨被仰候。中村玄春老願にて頃日通書を御講じ被成候。終に御よみ不被成候へども、替りたる事も有之間敷と思召、右の望に任せ御講被成候へば、替りたる事も無之旨被仰候。此等の御物語共承り、半時計罷在退出仕候。駿臺雜話叢書を拜讀仕候。是にて全部相濟申候。此集には仁義の説・浩然の氣・敬の説など御座候て、別て親切成儀多く御座候。惣て此冊子異論邪説を御警戒の説多く御座候間、印行罷成候はゞ何かと申もの共多く可有之候。其段申上候へば、先生も左様に被思召候旨被仰候。以上。

十月十六日

遵路

一、蝗害の届出
重て損亡御届の方

紀州・勢州之内、田方三拾壹萬五千五百石。内拾貳萬六千貳百五十石當荒。十八萬九千三百五十石大傷。

紀伊様

伯州・因州蟲入損亡高十萬石餘

因州馬取三十二萬五千石
松平相模守

蟲入損亡高壹萬三千五百石餘

木下主膳

蟲入損亡高三千石餘

播州三月一萬五千石
森安藝守

蟲入損亡高二萬七千五百石餘

雲州母里一萬石
松平志摩守

蟲入損亡高三千百石餘

備中松山六萬石
石川主殿頭

但州豐岡蟲入損亡高六千百石餘

但馬豐岡一萬五千石
京極修理

但州・播州蟲入損亡高壹萬石餘

但馬出石五萬八千石
仙石信濃守

一、羽喰郡神子原村の地割

十月十八日・十九日、能州羽喰郡神子原村の近地に割目出来、こゝかしこ高下も出来候。人馬に死傷無之、村屋も倒不申候。時として有之儀の由にて、土人は蛇ばみ・蛇ぐひ・蛇ぐへ・蛇持・貝割など、稱候。地陷の類にても候か。同日射水郡角間村にて、木戸山幅六十間餘、高さ二十餘丈崩候。其東南に猶裂口見え候よし。石動山の方へより候由。神子原村は公領御預地の方へもかゝり、此方へもかゝり候。御領分の分千五百六拾歩計、御領地の方百間四方計の内、右の趣に候事。

一、蝗害に付祈禱

黄金五枚宛

伊勢内外宮

黄金三枚宛

出雲大社

豊前宇佐宮

常陸鹿嶋

常陸香取宮

石清水八幡宮

白銀百枚

日光山准后

同三拾枚宛

東叡山

護持院

右は今年西國・中國・四國等蝗災爲非常之事、御祈禱被仰付旨、十月二十八日被命候。

一、黒背と申す獸

黒背と申獸、額に眼一つ有之、小きは鼬ほど、大きなるは狐ほど有之、人にはかまひ不申候。牛馬の前を通候へば牛馬即斃候。西國・四國筋へ出候て、長門國迄出候旨、江戸廻狀の寫十一月二十七日に来る。

愚謂。右の妖獸を以て黒背と爲すこと如何。黒背は宗末・明季に出て髣髴として獸形をなす耳。牛馬視之即死するの事なし。可疑。

一、新婦家系等の儀室鳩巢來狀